

科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 14 日現在

機関番号：53701

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2011～2012

課題番号：23720166

研究課題名（和文）ディケンズ作品における衛生改革と児童精神科学との相互関係の分析

研究課題名（英文）An Analysis of the Contexts of the Sanitary Reform and of the Mental Science in Dickens' s Novels

研究代表者

野々村 咲子（NONOMURA SAKIKO）

岐阜工業高等専門学校・一般科目（人文）・准教授

研究者番号：30390454

研究成果の概要（和文）：本研究は、19 世紀英国における衛生改革と児童精神科学の観点から、ディケンズの作品における社会表象の問題を追究するものである。衛生改革と児童精神科学の二つの文脈を分析し、作品において両者が相互に関係し合いながら機能するという独自の視点を持って論じる。作品に関係する文献を調査すると同時に、政治経済の動きや医学・精神科学における課題や論争について、当時の医学書や定期刊行物など広範囲にわたって検証する。

研究成果の概要（英文）：In this study, I discussed the social representations in Dickens's novels from the two perspectives of the sanitary reform and of the mental science in nineteenth-century England. I analyzed two contexts of the sanitary reform and of the mental science and concluded that both of them interact and function in the novels. I investigated various kinds of literature thoroughly, including contemporary medical documents and periodicals, for the purpose of outlining social, political and medical arguments of the day.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合 計
交付決定額	1,000,000	300,000	1,300,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・英米・英語圏文学

キーワード：ディケンズ，衛生改革，児童精神科学

1. 研究開始当初の背景

(1) 環境問題が大きく取り沙汰され、若年層の精神構造が問題視される現代においてこそ、精神科学の原点が確立する 19 世紀の英国における社会思想と論争に着目し、諸問題の根源を探究することは、近代化の過程で取り残されてきた問題を把握し検証する上で、大いに意義深いことと考えられる。

(2) 19 世紀の英国小説を歴史的観点から分析するという研究は多くなされてきたが、衛生改革と児童精神科学という、関係性が希薄と思われる二つの項目について掘り下げて分析し、19 世紀英国を代表する作家チャール

ズ・ディケンズ（Charles Dickens）の中期から後期にかけての作品において、それらの事象がいかに表象されてきたかを検証するという取り組みは、いまだ確立されていない興味深いものであると考えられる。

2. 研究の目的

本研究は、19 世紀英国における衛生改革と児童精神科学の両方の観点から、ディケンズの小説における表象の問題を追究するものである。研究期間内に、特に中期作品『ドンビー父子』（*Dombey and Son*, 1848）と後期作品『我が共通の友』（*Our Mutual Friend*, 1864-65）を、衛生改革と児童精神科学の二

つの文脈から分析し、二作品において、この両者が相互に関係し合いながら機能するという独自の視点を持って論じる。

3. 研究の方法

(1) ディケンズの中期作品『ドンビー父子』と後期作品『我らが共通の友』について分析を深め、他作品、定期刊行物、私書、研究書など、様々な文献を調査する。

(2) 19 世紀英国の衛生改革と、同時代の児童精神科学についての文献を詳細にわたって精査する。当時の政治経済の動き、医学・精神科学における課題や論争について踏まえた上で、医学書、定期刊行物など広範囲にわたって検証する。

(3) 大英図書館、ロンドン大学図書館、オックスフォード大学ボドリアン図書館に赴き、研究に必要な当時の一次資料を調査する。

特に情報収集を行った定期刊行物は、以下の通りである。

Blackwood's Edinburgh Magazine
(1817-1980)
Christian Observer (1802-74)
Cornhill Magazine (1860-1975)
Edinburgh Review (1802-1929)
Englishwoman's Domestic Magazine
(1852-81)
Punch (1841-1992)
Wesleyan Methodist Magazine (1778-1969)
Youth's Magazine (1805-67)

上記の定期刊行物の主要な記事については、コピーできるものはコピーし、パソコンに入力してまとめてデータ化しておく。これらの資料を徹底検証しながら、文学作品との関連を追究して、論文の形にまとめる。

(4) さらに、19 世紀の精神科学の発展については、次の定期刊行物にて情報収集する。

The Journal of Mental Science
(1858-1900)
The Journal of Psychological Medicine and Mental Pathology (1848-58)

また、衛生改革に関する当時の文献として、下記について分析する。

Henry Mayhew, London Labour and the London Poor (1861-61)
George Gissing, The Nether World (1889)

そのほか、児童精神科学に関する考察を深

める上では、下記について分析する。

Robert Brudenell Garter, On the Influence of Education and Training in Preventing Diseases of the Nervous System (1855)

George Meredith, The Ordeal of Richard Feverel (1859)

Henry Maudsley, The Physiology and Pathology of the Mind (1867)

上記の文献を精査することにより、当時の時代背景を踏まえた上で、ディケンズの二作品について、新たな視点を提示する。さらに、この二作品において、衛生改革と児童精神科学の二つの文脈が相互に関連し合って機能することについて検証していく。

(5) この研究を進める中で、オックスフォード大学大学院のサリー・シャトルワース教授にお会いし、様々な文献紹介や多くの貴重な助言やコメントをいただいた。これをもとに、さらに帰国後は、可能な限り文献収集をし、論としてまとめる作業をする。

4. 研究成果

本研究では、(1)19 世紀英国における衛生改革の文脈、(2)同時代の児童精神科学の文脈を明らかにした上で、ディケンズの中期作品『ドンビー父子』と後期作品『我らが共通の友』の二作品を取り上げ、前述の二つの文脈が相互に関係し合いながら作品内において機能するものとして考察する。

(1) 19 世紀英国における衛生改革の文脈

① 19 世紀のロンドンの急速な発展は、健康に対する被害を加速させるだけでなく、都市の社会秩序や文化的アイデンティティに対する新たな脅威となることを意味している。汚染が溢れ、腐敗物が道路に蔓延し、テムズ川に廃棄物や排せつ物が氾濫する。このような環境から、コレラやチフスのような伝染病が都市で流行する。目に見えない形で拡散する腐敗した空気・瘴気が人体に病気を引き起こすだけでなく、都市に道徳的・社会的無秩序を引き起こす結果となる。当時の衛生改革は、下水工事と道路改良工事を経てスラムの一掃を目指し、都市の浄化を志向したものであった。

② 英国の健康改革は、苦悩の 1840 年代(経済発展、人口増加、コレラ再来の時代)に頂点に達した。当時、下水、浴場、水は常にトップニュースだった。医者たちが次々に地域のスラムとそこから出る汚水について報告し、

人々は汚水に新たな目を向けた。突然、汚物が空気中にも、水にも、街にも、いたるところで散見された。

このように、汚染と病弊の蔓延は、当時の医学的・科学的な言説によって語られ、その中で汚物、病気、貧困、不道德は密接に関連する。ディケンズは、身体的な疫病を道徳的な腐敗や都市の無秩序と結び付け、その影響は犯罪、アルコール中毒、売春、政治的過激派のように様々な形で現れる。しかし本当の脅威は、社会的超越という点にあり、貧困者から富裕者へ、階級の下から上へと、身体的・道徳的・社会的悪疫が境界を超越して蔓延していくという点にある。瘴気というのは常に都市の社会的に低い地域から高い地域へと移動するものと想像される。瘴気と同じく、それらの危険は隔離することが出来ず、容易に年に浸透し伝染し拡大する。都市の汚染問題の表象は、社会の安寧を意味する境界線を突き崩す身体的・道徳的・社会的脅威として取り上げられる。

③ 本研究では、特に衛生問題を、都市生活の環境そのものだけでなく、さらに広義において、近代化の過程と関連付けて論じる。衛生改革は都市についての概念、すなわち都市空間の組織化と密接に関わる。場所・空間の概念、想像された地理学というものが、社会関係を示唆し、包含すると同時に、隠ぺいする可能性も秘めていることを論じる。

④ ディケンズの『我らが共通の友』は汚染によって特徴づけられる作品である。ごみ大和汚染された川のイメージによって明確であるように、作品世界は浸透的な汚染によって脅かされている。公衆衛生を取り扱う文学作品のコンテキストから見て、物質的汚染状況とは危険な社会状況を反映するものである。本作品において、都市汚染は通常貧困と連想される道徳的墮落を示唆するだけでなく、物質的価値に根差した社会秩序の頹廃をも予兆する。このような状況下における最大の望みは、物質的浄化が道徳的浄化をもたらし、個人と社会の贖いに至ることである。この再生は、テムズ川の地理を地誌学的に拡張的で綿密に局在化された川として想定し直すことによって機能する。川は汚染の根源であると同時に、汚染を免れる媒介でもある。川の流動性が登場人物に変化の可能性を与えていると考えられる。

(2) 19 世紀英国における児童精神科学の文脈

① 18 世紀後半から 20 世紀にかけて、心理学と精神分析学が大きく発展した。特に新たな知的学問として定着した精神科学においては、精神や記憶の働き、自己認識と意思の

限界についての議論が、医学と科学の専門領域で深まっただけでなく、様々なジャーナリズムを通して一般の読者にも広がっていった。意識の変容した状態としての無意識や夢、狂気に関する関心が高まり、そうした思想や議論が社会的な現象として諸々の文献に現れてくる。

② さらに、19 世紀は児童の精神について文学的・科学的・医学的精査の目が向けられた時代であった。ロマン派作家によって子供の存在に対する崇拜が確立されたとはいえ、児童の発達についての詳細にわたる文学的・科学的研究が始められたのはヴィクトリア時代の功績であった。この過程において、我々の現代の認識の枠組みが確立され、今日でも我々を悩ませるような問題の多くが提示された。

③ 本研究において、作家と実験者が児童精神の困惑させる領域を定義し探究しようとした文学と科学の領域の相互作用を検証する。特に 1840 年代から 1900 年代にかけては、児童精神の内面の働きが文学と教育の領域における明確な研究対象となり、学問としての児童精神科学が確立され、児童期の精神疾患と狂気について詳細にわたる分析がなされた時代であった。その背景には、中産階級の台頭による社会構造の変化、教育レベルの状況などがある。ディケンズ、ブロンテ姉妹 (the Brontë)、ジョージ・エリオット (George Eliot) らの作品において、児童の発達を内面から解読し、子どもについての定義を図る試みがなされている。

④ 特に、児童の発達についての文学が成熟する 1840 年代に焦点を当て、当時児童の精神を医学的研究領域として確立した医学雑誌 The Journal of Mental Science (1858-1900) や The Journal of Psychological Medicine and Mental Pathology (1848-58) を検証し、情報収集するとともに、同時代に出版された小説 Jane Eyre (1847)、Wuthering Heights (1847) と比較しながら、Dombey and Son (1848)、David Copperfield (1850) を分析する。当時の児童期のモデルの返還に注目する。医学的・心理学的テキストを精査し、さらにより広義の文化的コンテキストに焦点を当てることによって、児童精神科学の発展に対する視点に補足を行うことが出来る。

⑤ 特にディケンズの『ドンビー父子』は、当時の医学雑誌が問題として警告した児童の早熟の促進と教育管理体制の過大な圧力の問題について追及している。資本主義の家父長制の幻想を予兆し、圧政的な父親の手に

よる組織的な教育に焦点を当て、教育を同時代の発達モデルと成長の自然な過程を言う文脈に当てはめる。児童の発達に関する概念作用は、家庭的・社会的・経済的構造に複雑に絡めとられていることを示唆している。哀れなボールに課せられた教育的圧力は、鉄道の開発に伴う経済発展によって確立される時空間の新たなモデルの一部と考えられる。本作品の分析は、児童の発達における多層的な理解の言語的・象徴的複合性をとらえるために有益である。

(3) 本研究において、上述の(1)と(2)の二つの文脈が相互に作用しながら、ディケンズの二作品において機能するものとする。環境問題が大きく取り沙汰され、若年層の精神構造が問題視される現代においてこそ、精神科学の原点が確立する19世紀の英国の社会的思想と論争に着目し、諸問題の根源を探究することは、近代化の過程で取り残されてきた問題を把握し検証する上で、大いに意義深いことであると考えられる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

(1) 野々村咲子、ディケンズの『ドンビー父子』における汚染と病、岐阜高専紀要、査読有、第48号、2013、1-5

〔学会発表〕(計0件)

〔図書〕(計1件)

(1) 大石和欣、滝川睦、中田晶子、編著、『境界線上の文学』、彩流社、2013、47-64、

〔産業財産権〕

○出願状況(計0件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

○取得状況(計0件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

野々村 咲子 (NONOMURA SAKIKO)

岐阜工業高等専門学校・一般科目(人文)・
准教授

研究者番号：30390454

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：